



Title	東南中国沿海地域の新石器文化
Author(s)	後藤, 雅彦
Citation	地理歴史人類学論集 = Journal of Geography, History, and Anthropology(8): 83-92
Issue Date	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44332
Rights	

東南中国沿海地域の新石器文化

後藤 雅彦

Neolithic Culture in Coastal Area of Southeast China

Masahiko GOTO

要 旨

東南中国、中でも沿海地域の新石器文化の形成と展開に焦点をあて、中国新石器文化の中での位置付けを再検討し、その特徴を明らかにした。最近の調査によって、東南中国沿海地域では、紀元前 6000 年の新石器文化出現期から貝塚を伴うことが明らかになったが、植物利用の進展が新石器文化の定着に重要な役割を果たしていたと考えられる。その後も、農耕に集約化せず、地域ごとに漁撈・狩猟・採集の生業活動をその環境に応じながら展開したことが東南中国沿海地域の新石器文化の特徴である。

キーワード：東南中国、新石器文化、咸頭嶺遺跡、貝塚

はじめに

長江流域の南側に位置する東南中国の先史文化は、長江中・下流域という稲作先進地帯からの影響を受けながらも、独自性の強い文化を形成していた。この独自性については、分断された地域文化と海洋性をあげることができる（巖 1994）⁽¹⁾。

そして、長江流域からの文化受容の受信地域としてばかりでなく、東南中国は、台湾や東南アジアへの文化拡散の発信地域でもある。

東南中国は、台湾及び琉球列島の先史文化と同様、中国大陸の南縁あるいは日本列島の南縁という周辺文化として位置付けられてきた。それに対し、筆者は、新たな地域区分として、東アジア亜熱帯沿海地域を設定し比較研究を進めている⁽²⁾。

東アジア亜熱帯沿海地域では貝塚を伴う遺跡が多く、周辺の稲作集約地域に比べて、貝塚の継続期間が長い。従来、東アジアにおいて、貝塚の消滅と稲作を中心とした農耕文化の定着を重ね合わせて理解されてきた。しかし、東アジア亜熱帯沿海地域における貝塚は、その継続期間が長いことから、貝塚形成のあり方の変化を地域的に捉えていくことが重要である。

さらに周囲の海域に目を広げれば、東南アジア海域の新石器集団、そしてオセアニアのラピタ集団は、農耕だけでなく、漁撈採集や狩猟採集という生業と熱帯性農耕の両者を行う海洋性志向の強い人びとでないかと想定されている（田中・小野 2018）。狩猟漁撈採集と農耕の対比ではない状況が、東南中国の沿海地域の新石器文化にも認められるか、本稿では、東南中国の沿海地域（主に閩江下流域・河口と珠江三角洲）に焦点をあて、中国新石器文化の

中での位置付けを再検討し、その形成と展開の中で、その特徴を明らかにしたい。

1、中国新石器文化の輪郭と東南中国

宮本一夫（2010）は、中国大陸の新石器時代区分にしたがって、東アジア全体を視野に入れた時間軸の整理を行った。東アジア新石器時代は、較正年代で紀元前 7000 年以前を早期、紀元前 7000～5000 年を前期、紀元前 5000～3000 年を中期、紀元前 3000～2000 年を後期、紀元前 2000 年以降（中国大陸の中心では青銅器時代）を晩期に設定した。

また、焦天龍（2011）は、南中国の新石器文化の動向として以下のように設定している。

第 1 段階 紀元前 6000～4500 年。海洋経済の始まり。跨湖橋文化と河姆渡文化。

第 2 段階 紀元前 4500～3500 年。海洋経済の発展。殼丘頭文化。

第 3 段階 紀元前 3500～2300 年。海洋経済の分化。曇石山文化と大帽山文化。

第 4 段階 紀元前 2300～1500 年。海洋経済の衰退と農業経済。

ここで注目されるのが海洋経済と農業経済の関わりである。前掲の宮本も東アジアでは貝塚と稲作農耕は負の相関関係にあると指摘している。生業活動全体を視野にいたした点は、新石器時代の特徴を抽出するにあたって重要なポイントといえる。

一方、筆者はこれまで、東南中国沿海地域における土器の出現期を紀元前 5000～4000 年紀頃とし、それ以前の土器を伴わない文化遺存（Ⅰ期）に設定し、縄蓆紋土器を代表とする文化遺存をⅡ期、曇石山文化などの新石器時代後期をⅢ期（紀元前 2500 年前頃）、紀元前 2000 年紀以降をⅣ期という時期区分を設定していた⁽³⁾。

近年の発掘調査、とくに大陸沿岸島嶼域の調査によって、土器を伴う遺跡が紀元前 5000 年を遡る状況になっており、宮本の設定した東アジア新石器時代前期にまで至るようになった。そこでⅠ期は、土器出現期あるいは貝塚出現期と捉えることが必要となっている。

すなわち、亮島島尾遺跡の発掘は、東南中国沿海地域から台湾にかけての初期新石器文化の成立を探るうえで重要な成果となる。最近、金門島の金龜山遺跡を含めて紀元前 5000 年前より古い可能性のある段階として「前大坵坑文化期」が設定されている（洪 2013）。

年代に着目すると、新石器時代前期の長江下流域において河姆渡文化より古い跨湖橋文化が確認され、長江南岸の山間盆地から長江流域低地に進出し、水辺の資源に依存する多角経済が想定されている（中村 2009）。そして、水辺の環境に適応した高床式住居を想定させる梯子、水域の移動に用いられたと想定される丸木舟が出土することは興味深い。

そうなると、東南中国沿海地域の紀元前 6000 以前の土器出現期以前を先Ⅰ期（先土器時代）とすることで、むしろ、東南中国の新石器文化の展開を東アジアの中で正確に位置付けることができると考えるようになった。

先Ⅰ期は、東南中国沿海地域においては剥片石器群を代表とする土器を伴わない文化遺存が継続する。完新世に属する新期の剥片石器群として、香港東湾Ⅰ期文化があり、台湾の長濱文化との比較が指摘されている。砂丘遺跡である東湾遺跡の下層は剥片石器群を主体とし、砂丘上の立地や骨角器製作用と考えられる砥石が出土していることから、海洋民的な性格も想定されている（加藤 1995）。長浜文化の骨製品についても漁撈具（釣針）であれば、やはり、漁撈活動についてはその変遷過程が問われる。

以上のような中国新石器文化の動向をふまえて、本稿では新石器文化の形成過程を整理す

るために、I期の捉え方に修正を加えて、以下のように東南中国沿海地域の先史文化の輪郭を捉えたい。

先I期：土器出現期以前。現時点では紀元前6000年以前。長江中・下流域などではすでに土器文化が展開する東アジア新石器時代早期に相当。

I期：貝塚出現期前半。東アジア新石器時代前期。

II期：貝塚出現期後半。東アジア新石器時代中期。台湾も含めて東南中国沿海地域に遺跡（貝塚）が広く分布するようになる。

III期：貝塚展開期。東アジア新石器時代後期。長江下流域からの稲作文化の波及。

IV期：貝塚転換期。東アジア新石器時代晩期。殷系文化の南下と南中国の斉一性の形成。

2、東南中国沿海地域の新石器文化の形成

近年の資料をもとに、東南中国沿海地域での新石器文化（貝塚出現期）の形成過程を整理し、東南中国沿海地域の内外の関係も含めてその特徴を捉えたい。

貝塚出現期前半のI期は、現時点では島尾I遺跡で紀元前6000年にさかのぼる貝塚が確認されている。馬祖諸島亮島島尾I遺跡（陳・邱2013）は、生業活動を示す遺物として、石器では片刃石斧、尖状石器、石英質小石片以外に、植物加工用の磨石・叩石類、骨器では刺突具、鏃などの狩猟具（漁撈具）が出土している。石鏃がみられない点は、殻塚頭類型文化とは異なり、骨製の刺突具（銛頭）は同時期に特徴的である。やはり漁網錘は出土していないようである。ただし、帰属年代についてはC14年代測定値と合わせて、出土遺物のさらなる検討が今後の課題である。

貝塚出現期後半のII期になると、東南中国の大陸側では多くの貝塚遺跡が出現する。所謂、縄蓆紋土器文化といわれる遺跡である。多くの貝塚が海岸沿いの台地上、沿岸の島嶼に立地する。層序関係では、後続時期の文化層が上層に堆積する例は少ない。埋葬遺構を伴う貝塚も少数であるが確認されている。居住地に選択された遺跡の継続性は比較的短く、移動性をもつ居住形態が想定される。貝塚以外にも、珠江三角洲では砂丘遺跡が多くみられる。

II期の東南中国沿海地域では閩江河口に位置する海壇島に位置する殻塚頭遺跡出土の多角口縁釜に着目すると沿海ルートによる地域間交流として長江下流域との関わりが考えられる。また、珠江三角洲では、長江中流域、大溪文化の彩陶が波及している。II期においては、東南中国と周辺地域との交流も明らかであり、また地域内でも石器製作址が確認されているように⁽⁴⁾、交流・交易が地域内でも進行していたことがうかがえる。

このように東南中国沿海地域では、東アジア新石器時代前期まで遡る状況が確認され、さらに、それが貝塚であることは、その後の新石器文化の展開を考える上で重要である。

一方、同地域において、従来は完新世に入りながらも先土器文化（先I期）が継続していたと理解されているが、福建側のやや内陸に位置する福建省奇和洞遺跡は、漳平市の東北42kmの海拔442mに立地する洞穴遺跡である（福建博物院他2013）。1期が今から17000～13000年前の旧石器時代から新石器時代への移行期、2期は12000～10000年前の土器を伴う新石器時代早期、3期は10000～7000年前である。3期は東南中国沿海地域のI期に相当し、2期は先I期の年代であるが、すでに土器が出現している点は、沿海地域とは異なる。

また、広東側でも英徳牛欄洞遺跡（約相対高度100m）が知られる（英徳市博物館他1999）。

第1期は打製石器と骨器、更新世の絶滅動物をわずかに含む。14C年代は約11500年前で

ある。第2期は打製石器の他に有孔石器、有孔貝製品が出現する。動物骨は現生種で、大量の貝殻を含む。14C年代には差が認められるが、近いものを平均すると10450年前。第3期は刃部磨製石器、砥石（骨器研磨用）と土器が出現、年代は10000～8000年前とされる。

3、広東咸頭嶺遺跡の調査成果と周辺との比較

以上のように新石器文化の成立としてI期が重要であることはいうまでもない。ただし、同時期の文化内容について詳細に検討できるのがII期以降となる。

II期の珠江三角洲の咸頭嶺遺跡は、1985年より2006年にかけて5次にわたる発掘調査が実施されている。2006年の発掘調査の詳細な報告が2013年に刊行され（広東省文物考古研究所他2013）、東南中国の先史文化を検討する上で重要な成果となった。II期（7000～6000年前）の珠江三角洲の代表的な遺跡として、時期区分が明確に提示にされている。

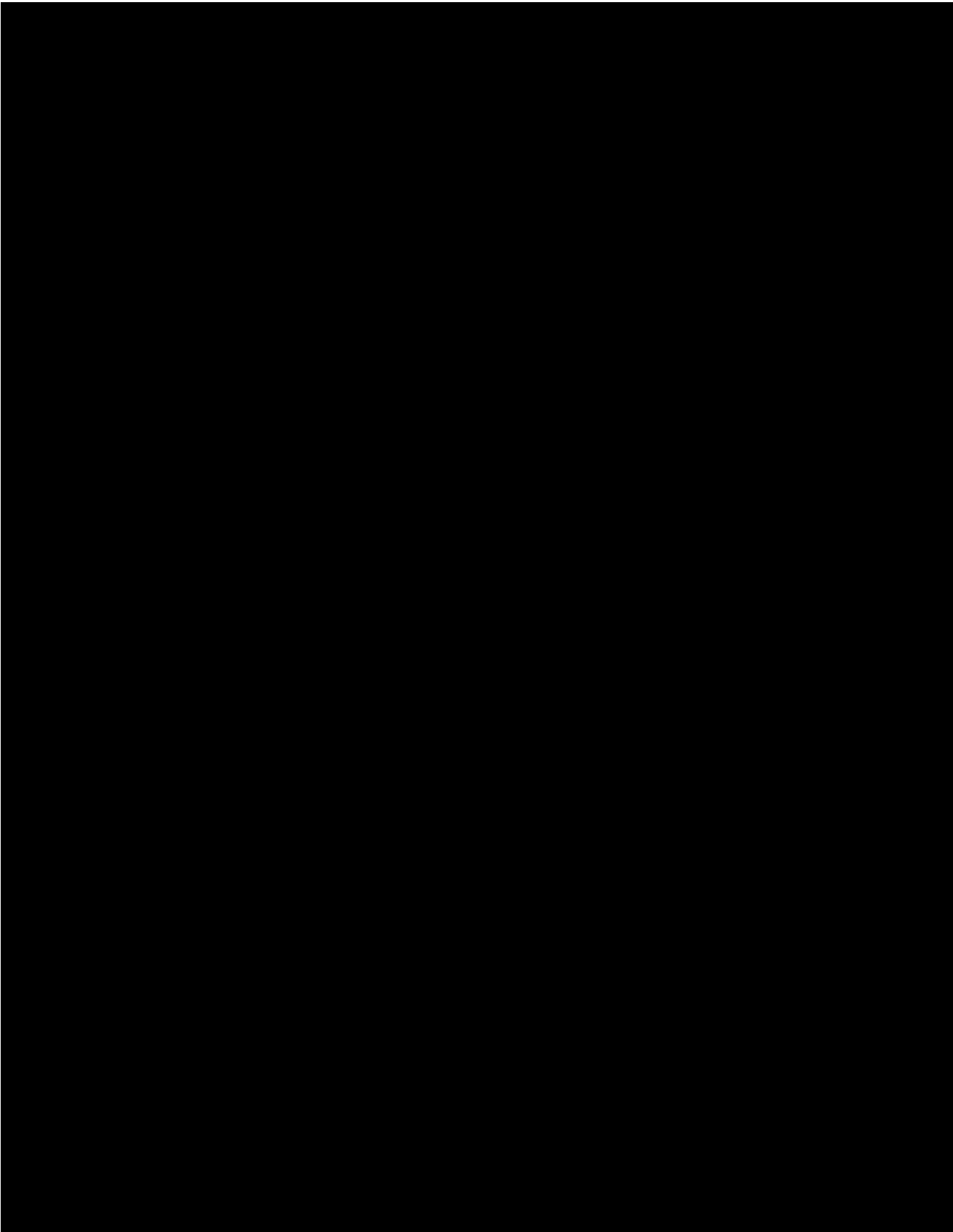
層序関係と出土遺物によって、新石器時代は5段3期に時期区分されている。出土遺物から1～3段は連続し、4段と5段も比較的緊密な関係で、3段と4段の間に差異が認められるとしている。C14年代測定値からすると、1段は、測定値5点、校正年代で4840－4540BCとされる。但し2004年調査時の測定値に1点4940－4770BCがあり、今から7000年前に近い。2段は、測定値4点、1点が1段より古い年代を示す他、3点が4910－4500BCの間に入る。3段は測定値1点、4690－4460BCで上限が2段に近い。4段及び5段については測定値が1点、かつその数値に誤差があると判断されており、報告書では4段について、他遺跡の年代値を参考に今から6200年前、5段も4段に近いという判断から今から6000年前に位置付けている。

ここで、東南中国における新石器文化の形成を考える上で重要である最古段階の1段を中心に出土遺物をみてみたい（第1図）。

土器は、丸底釜でやや長腹の形態を有し（1・2）、支脚を伴う（3）。東南中国の丸底釜の定着がうかがえる。そして、圈足盤・罐と杯などが出土している（4～9）。彩文が施されたものもある。

石器では、19点の内、石料7点の他、片刃石斧3点（10・11）、凹石3点、砧3点、砥石2点が出土している。これらの石器は、基本的に5段まで継続するが、2段に杵（15）、拍（17）、餅形器（16）が加わる。また、4段になると片刃石斧の中から有肩石斧が含まれるようになる（18）。石鏃などの狩猟具がみられず、植物加工具が主流である。

石拍は、同時期の珠江三角洲では一般的に出土するものとしてしられ、樹皮布叩き具の用途が想定されている。咸頭嶺遺跡の発掘報告の中で鄧聰（2013）による論考が掲載されている。石拍は台湾海峡兩岸地域で出土することが、南島語族の源流を探求する上で注目されている。しかし、最近、台湾の出土事例について、郭素秋（2013）による詳細な検討によって、台湾の独自性も認められる。台湾でも約6000年に柄をもつ棍棒型打棒が紡錘車とともに出土し、これが大陸側の紡錘車を伴わない薄身の複合型打棒とは異なる点が指摘されている。台湾では、その後、複合型も出現するが器身の厚いタイプで、台湾固有の棍棒型から派生したと想定されている。器物の系統が別なのかどうか、今後、さらに、帰属年代と分布から検証も必要であろうが、台湾海峡兩岸地域に共通する要素であることは、今後も注意される問題であろう。



ここで、Ⅱ期の出土石器について、周辺地域と比較してみたい。殼坵頭遺跡は閩江河口周辺の海壇島西北部の山麓斜面地に立地する貝塚である（福州市文物考古隊他 1995）。出土石

器は、打製石器 15 点の他、磨製石器 138 点である。磨製石器では、片刃石斧が多く、横断面が三角形を呈するものが特徴であり、後続する曇石山文化の片刃石斧の系譜が辿れる。他に石斧 2 点、石刀 1 点が出土している。出土骨器は 37 点、鏝 10 点、ヒ 8 点、錐 6 点、鏃 4 点、骨料 9 点他である。カキ殻を用いた工具も出土している。狩猟具の骨鏃については、曇石山文化と共通することから、同時期までこれらが遡る点を確認される。

前述したように福建沿海地域の島嶼部において I 期に遡る骨器（鏃＋銛頭）が出土していることから、東南中国沿海地域において狩猟・漁撈活動が新石器時代の形成にあたって、重要な生業活動であったことは間違いない。これが、沿海地域と言っても、福建の沿海地域の特徴となるのか、現時点では判断をくだすことは難しい。しかし、珠江三角洲の咸頭嶺遺跡にみられる植物加工具が主流である遺物組成に注意したい。

一方、福建省でも内陸側の奇和洞遺跡（第 2 図）では、打製石器に磨製石器が多様化している。磨製石器には片刃石斧（1・2）を主体に、斧（3）、砥石（4）、鏃（5）なども含まれる。骨器には簪・菅とされるもの以外に鏃（7）や釣針（8）があり、狩猟・漁撈具がみられる点は注目される。

珠江三角洲の東莞蠓崗遺跡は、3 期に区分され、1 期今から 6000～5500 年前、2 期 5500～5000 年前、3 期 5000 年～4500 年前とされる（広東省文物考古研究所他 2008）。ここでは、2 期の出土石器を見ると、基本的に咸頭嶺遺跡と共通するが、尖状器が特徴である（第 3 図 1・2）。貝類の採集工具とされている。同遺跡は、貝塚を伴い、骨器（鏃・錐）が出土している。尖状石器は I 期の島尾 I 遺跡でもみられるようだが、その形態分類や機能・用途について検討課題は多い。

貝塚出現期は後半段階になると遺跡数が増大する。その背景には咸頭嶺遺跡にみたように植物利用の定着や他遺跡でみられた漁撈・狩猟具の定着など、環境に応じた生業活動が地域ごとに定着したことを示すのではないだろうか。

また、III 期以降、東南中国沿海地域で一般化する石鏃は、奇和洞遺跡でもみられるものの、II 期にすでに定着したとはいきれず、III 期からの要素と現時点では考えられる。また漁網錘についても、III 期に普及するが、II 期に錘とされるものは類例があるものの、網を縛るための加工を有する土錘・石錘を含めて漁網錘の出現時期の詳細は明らかでない。

4、東南中国沿海地域における新石器文化の形成とその特徴

筆者はこれまで、長江下流域の稲作文化の波及に対する東南中国の受容のあり方を検討してきた（後藤 2011・2012a）⁽⁵⁾。すなわち、III 期になると東南中国では、内陸地域の石峡文化のように、長江下流域からの稲作文化が波及し、定着していたのに対し、沿海地域では、稲作文化の波及は認められるが、貝塚形成が継続するように漁撈・狩猟・採集が主要な生業活動であったと考えられる。宮本（2005）も、南の非農耕地帯として、石峡文化を農耕社会への転換期として位置付けている。

閩江下流域では IV 期以降、紀元前 2000 年紀になると貝塚の衰退時期と考えられ、後半になると埋葬遺構が主体の黄土侖遺跡が確認されている。一方、福建北部では曇石山上層と密接な文化関係もちながら、貝塚遺跡がみられる。福建南部では貝塚遺跡が継続するが、貝塚の立地条件に多様な傾向を示すようになり（後藤 2002）、むしろ漁撈活動が活発になる遺跡

さえ同時期にみられることに筆者は注意したい（後藤 2015）。

やはり、問題となるのは新石器文化の形成過程を明らかにすることである。東南中国沿海地域は、これまで、完新世の中頃にはいっても、先土器文化が継続し、周辺の東アジアの各地域と比べて、かなり土器文化の形成が遅れていたと考えられていた。しかしながら、本稿で検討したように、最近の調査事例から、同地域においても、東アジア新石器時代前期に遡る段階に貝塚を伴う遺跡形成が認められるようになった。

ただし、程嶺（2015）は、台湾海峡兩岸地域の先史集落について、海岸線の変化とともに整理し、完新世の前半、今から 11500－7500 年前に海島集落が出現するが（本稿先 I 期から、一部 I 期に相当）、その後の海水面の上昇によって、発見されている遺跡は少ないとした。

そして、問題となるのが、新石器文化出現期の文化内容である。土器について、宮本一夫（2009）によると、華中・華南の東アジア新石器時代前期には釜（煮炊き具）、壺（貯蔵具）、鉢（供膳具）という基本的な器種構成が形成される。しかし、同時期の東南中国沿海地域 I 期では、遺跡の事例が極めて少ないが釜と鉢を基本構成とする。

また、I 期以来、狩猟・漁撈具と想定される骨器とともに凹石が出土しており、沿海地域（島嶼）の貝塚形成という海洋適応がうかがえるが、植物採集も重要な生業であったと考えられる。これは、後続時期の II 期にもみられる特徴である。

咸頭嶺遺跡を例にすると、III 期に普遍化する石鎌や漁網錘などがほとんどなく、植物加工と想定される凹石や石杵が多い。また加工具である片刃石斧は古期より出土している。ただし、珠江三角州でその後、流行する有肩石斧は、若干時間差をもって出現している。片

刃石斧が珠江三角州で定着する時間経過の中で、地域色をもった形態へと変化したと捉える。

すなわち、植物利用の促進が認められる点は重要であり、沿海地域であり海洋適応の進行ばかりでなく、安定した新石器文化の形成には、東南中国においても植物利用が重要な生業であったと考えられる。一方では、漁撈・狩猟具も遺跡によって多く含まれる場合も新石器時代を通じてみられる。とくに長江下流域の稲作文化が波及した後にも漁撈活動を主体と想定され場合なども沿海地域の特徴であろう（後藤 2017）。

まとめ

以上、東南中国沿海地域の新石器文化の形成過程とその後の展開をみると、漁獵・狩猟・採集活動と農耕の関わりは、時間軸の中での変遷というばかりでなく、地域ごとの環境に対する適応のあり方を示しており、その点が顕著であることが東南中国沿海地域の特徴といえる。東南中国沿海地域では、海洋経済と農耕経済、あるいは貝塚と稲作文化の対比ではなく、セットとなった生業活動がその実態を示すと考えたい。

すなわち、東南中国沿海地域の新石器文化は、海洋性を示す点が特徴であるが、海洋資源にただ依存したわけでもなく、むしろ、長江下流域のように稲作農耕の集約化をたどらない非農耕集約型の新石器文化である点が特筆されると考える。

考古学的な遺物研究とともに、遺跡の立地条件と自然環境の復元が、今後、各地に展開した新石器文化の特徴を明らかにする上で重要である。

2017年12月15日日本中国考古学会中部支部例会、2018年2月11日「東シナ海南部の島嶼地域を巡る先史時代のヒト・モノの動き」（研究代表者：山極海嗣氏）において、東南中国の先史文化について発表をする機会をいただいた。その際、従来の東南中国の先史文化の枠組みについて再検討が必要であると考えた。発表の機会をつくっていただいた西江清高氏、山極海嗣氏をはじめ、ご教示いただいた皆様に、感謝の意を表したい。

註

(1) 1994年『中国通史第2巻遠古時代』では嚴文明（1994）によって、中国東南部と華南の地理的環境として、第1として、海岸線が長く、多くの島嶼を包括する、そして第2として丘陵が多く、平原が少ないことをあげた。そして、前者により、海洋文化の発展を捉え、その中で先史時代において貝塚が多くみられること。そして後者により、地形的に分断され、連続しない状況で、一つの中心があったのではなく、先史文化が多くの地域に分割して存在していたことが指摘されている。これをふまえて、後藤（2012b）は東南中国の先史文化の特徴を検討した。

(2) 筆者は、琉球列島と近接する台湾の比較において、東アジア亜熱帯島嶼域、さらに東南中国を加えたより広い地域を東アジア亜熱帯沿海地域と設定している。

(3) 註1記載の後藤（2012b）やその他、2017年以前に発表した論考。後藤（2017）においても島尾I遺跡をとりあげながらも、時期区分については修正していない。また、後藤（2009）では、東南中国沿海地域における新石器文化について中国全体の中で位置付け、さら

に東南中国における土器の起源と展開について周辺地域と比較した。本稿では、これらを踏まえながらも、最近の研究状況を加味し、新石器文化の成立状況について再検討を加えた。また、後藤（2017）の中でも貝塚自体の変化として、出現期－展開期－転換期に区分したが、出現期について、形成期という用語と混同して使用している。本稿では、出現期に統一して区分したい。

（4）宮本（2005）は、珠江三角洲の西樵山遺跡の石器製作址を例に地域社会の安定を認めた。

（5）東南中国における稲作の開始について、宮本（2017）は、最近の野生イネのゲノム分析による珠江流域を稲作起源地とする研究成果を紹介しながらも、考古学的調査研究の成果とは一致しないとした。本稿で検討したように東南中国における新石器文化の形成からしても、やはり、稲作文化に関しては、長江下流域からの影響が強いと考える。

引用文献

- 英徳市博物館他 1999『英徳史前考古報告』広東人民出版社
- 広東省文物考古研究所他 2013『深圳咸頭嶺 2006年発掘報告』文物出版社
- 広東省文物考古研究所他 2008「東莞市南城区蠓崗遺址初步発掘簡報」『華南考古』2、151－179頁
- 郭素秋 2013「縄文時代に平行する台湾の縄蓆文土器とその文化様相について」『講座日本の考古学3 縄文時代（上）』684－702頁、青木書店
- 加藤晋平 1995「台湾、長濱石器文化の系譜について－香港考古学事情」『國學院雑誌』96－7、1－12頁
- 嚴文明 1994「第四章第三節 東南與華南」『中国通史第2巻遠古時代』464－509頁
- 洪曉純 2013「從中国東南沿海到太平洋－由考古学新看南島語族史前史」『東亞考古的新發現』、279－331頁、中央研究院
- 後藤雅彦 2002「東南中国の貝塚遺跡」『琉球大学法文人間科学科紀要 人間科学』10、149－180頁
- 後藤雅彦 2009「東南中国における土器の起源と展開」『加藤晋平先生喜寿記念論文集 物質文化史学論聚』101－116頁
- 後藤雅彦 2011「先史東南中国における稲作農耕の再検討」『地理歴史人類学論集』2、23－32頁
- 後藤雅彦 2012 a 「東アジアの稲作の拡散と人の移動」『東アジアの間地方交流の過去と現在－濟州と沖縄・奄美を中心にして－』、347－364頁、彩流社
- 後藤雅彦（盧柔君訳）2012 b 「中国東南史前文化及其交流」『考古学研究』9上、106－117頁
- 後藤雅彦 2015「東南中国における先史時代の漁撈活動」『人間科学』32、125－136頁
- 後藤雅彦 2017「東南中国沿岸島嶼域の考古学遺跡について」『人間科学』36、143－158頁
- 焦天龍 2011「太平洋考古学與中国東南沿海」『百越研究』2、33－38頁
- 田中和彦・小野林太郎 2018「海域東南アジアの先史時代とネットワークの成立過程－「海人」

- の基層文化論」『海人の移動誌—西太平洋のネットワーク社会—』86—117頁、昭和堂
- 陳仲玉・邱鴻霖 2013『馬祖亮島島尾遺址群発掘及『亮島人』修復計画』連江县政府出版
- 程嶺 2015「台湾海峡兩岸史前聚落的擴張和海洋適應」『百越研究』4、240—251頁
- 鄧聰 2013「咸頭嶺遺址出土石拍技術結構分析」『深圳咸頭嶺 2006年發掘報告』407—421頁
- 中村慎一 2009「中国長江流域の稲作文明と弥生文化」『弥生時代の考古学Ⅰ 弥生文化の輪郭』21—34頁、同成社
- 福州市文物考古隊他 1995「福建平潭島考古調査新収獲」『考古』1995—5、577—584頁
- 福建博物院 2013「福建漳平市奇和洞史前遺址簡報」『考古』2013—5、7—19頁
- 宮本一夫 2005『中国の歴史 01 神話から歴史へ 神話時代 夏王朝』講談社
- 宮本一夫 2009『農耕の起源を探る イネの来た道』吉川弘文館
- 宮本一夫 2010「縄文文化と東アジア」『縄文時代の考古学 1 縄文文化の輪郭 - 比較文化論による相対化』127—139頁、同成社
- 宮本一夫 2017「中国大陸における初期農耕の出現と拡散」『農耕の起源と拡散』69—84頁、高志書院